

江戸時代の中頃から、遠浅の海を干拓して新しく田を開く工事がすめられました。明治学区付近でも長三郎新田（一七二二年）、図書新田（一七一三年）、紀左衛門新田（一七五四年）、氷室新田（一八五六年）、氷室外新田（一八五六年）などが次々にでき、海が次第に陸地になっていきました。

干拓をするときには、普通、まず海岸にたくさんヨシを植え付け、何年かそのままにしておきます。ヨシが茂るにつれて根元に土がたまりますが、そこにそだ（木の枝の束）や石で堤防の枠を築き、中を赤土で固めて堤防にします。最後に堤防を閉め切った後、田のあぜや排水路などをつくり田や畑にしていきました。

今、紀左衛門神社、紀左衛門通、紀左衛門橋と名付けられている紀左衛門とは、紀左衛門新田を開発した加藤紀左衛門を中心とした人々の血と汗と涙をたたえて名付けられたものなのです。

加藤紀左衛門の先祖は、熱田神宮付近に住む豪族でした。紀左衛門の兄は「羽城の殿様」と呼ばれて、熱田の海一帯の警察の役目をし、図書新田を開発しました。紀左衛門は、図書新田、長三郎新田の西南に宝暦四年（一七五四年）紀左衛門新田を開発したのです。